

アメリカ児童図書館黎明期に子どもの文学普及に貢献した人々 (2)

～アン・キャロル・ムア②～⁽¹⁾

金 山 愛 子

はじめに

アメリカは1920年代から1930年代にかけて絵本の黄金時代を迎えた。それに続いてアメリカ的な特徴を備えた物語が現れる。これらの絵本や子どもの文学の出版背景には、編集者によるすぐれた作家や画家の発見と後押し、全米で広がっていった図書館内の児童部門の開設による子どもに開かれた図書館事業の展開、編集者と図書館員の連携、アメリカ図書館協会 (American Library Association, 1876年設立) による支援、すぐれた作品に与えられる賞の創設があり、それらが個別ではなく大きな運動としての広まりがあった。その中でもニューヨーク公共図書館児童部門の責任者であったアン・キャロル・ムア (Anne Carroll Moore, 1871-1961) は、その強い意志力と明晰な洞察力と批評力、子ども達への共感、柔軟な工夫の才に富んだ女性であったが、図書館員の指導だけでなく、多くの編集者に影響を与えることで貢献した。前稿「アメリカ児童図書館黎明期に子どもの文学普及に貢献した人々 (1) ～アン・キャロル・ムア①～」では、19世紀末から20世紀初頭にかけてアメリカ国内の図書館で相次いで開設されていった児童部門への期待について論じた。さらに、同時期に出版された児童百科事典『コンプトンズ・エンサイクロペディア』 (*Compton's Pictured Encyclopedia*, 1922) では、何を子ども達に伝え、どんな地平を子どもに見せたいと考えていたのかを紹介した。その図書館活動を牽引していったのがニューヨーク公共図書館のアン・キャロル・ムアであった。⁽²⁾ ムアの仕事を大別すると、図書館員としての子どもと本をつなぐ仕事、図書館員養成のための仕事、書評を通して作家や画家と出版者を育てる仕事の三つに分けることができる。子どもと本をつなぐ仕事と図書館員養成のための仕事については前稿で論じたが、批評を含めて彼女のすべての営みのゴールは子ども達によい本を届けることである。

ムアは図書館の仕事をするかたわらで、精力的に子どもの本の書評を発信していく。アイオワ州立大学図書館学部サマースクールで講義をした際に準備した *A List of Books Recommended for a Children's Library* (1902) に始まり、1918年からは『ブックマン』 (*The Bookman*) における子どもの文学の

書評欄を担当した。これをまとめたのが*Roads to Childhood* (1920)、*New Roads to Childhood* (1923)、*Cross Roads to Childhood* (1926)である。後にこの三冊から抜粋、加筆し、改訂を加えて*My Roads to Childhood* (1939)が出版された。他方では、『ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン』紙(*The New York Herald Tribune*)内の"Books"という週刊の書評欄を担当し、その名前を"The Three Owls"とした。この三羽のフクロウは、作家、画家、批評家を表している。1924年から1930年に書評欄自体が財政危機のために閉じるまでこれは続き、これらの書評をまとめて*The Three Owls*として3巻が、それぞれ1925年、1928年、1931年に出版された。その後も1936年から1960年、ムアが没する直前まで続いた『ホーンブック』(*The Horn Book Magazine*)で"The Three Owls' Notebook"の形で書評は続いた。

この他にも『コンプトンズ・エンサイクロペディア』のいくつかの項目はムアの筆によるものである。本稿で取り上げる「七段の子どもの本棚をつくる」("Seven Stories High; the Child's Own Library")と、それにつけられたブックリスト「子どもの本棚のためのブックリスト」("A List of Books for Children's Own Libraries")は1932年から掲載され改訂を重ねた。その他にも"Literature for Children" (1932~)、"Choice of a Hobby" (1936~)とそれに添付のブックリスト"Reading for Pleasure" (1937~1944)があり、短い紹介文として"Storytelling" (1932~)がある。

これだけ見てもムアが出版界や図書館に対してどれだけ大きな影響力を持っていたかが窺い知れる。レナード・マーカス(Leonard Marcus)は「彼女の評判は全米的なものであったので、リストに掲載された本は確実な売れ行きが保証され、掲載されなければ忘却される。編集者、著者、挿絵画家は常にムア女史を訪ね、進行中の仕事に対するアドバイスを仰いだ」と言っている(Marcus, 55)。前稿で紹介したマーガレット・マッケルダリー(Margaret McElderry)のムアのオフィス105号室には絶え間なく来客があったとの証言もある(McElderry, 85)。必ずしも本の売れ行きのためではなく、第一次世界大戦が終わり、急速な経済発展の道を邁進するアメリカにあって彼らは、子ども達にどのような価値を伝え、どのような世界を見せてあげたいか、何が子ども達を守りうるのかというヴィジョンを共有し確認していったに違いない。アメリカで絵本や子どもの文学の世界が開花した根底には、子どもの本を選ぶムアのぶれない眼識と良識があったと言える。本稿ではムアの書評やブックリスト、作品を通して、ムアがどのような基準をもって本を選別し、子ども達に薦めたいと考えていたのかを考察する。

「七段の子どもの本棚をつくる」とそのブックリスト⁽³⁾

「七段の子どもの本棚をつくる」("Seven Stories High")の翻訳は前号に掲載したが、要旨をまとめると、どの子も自分だけの本を持って育っていくべきであるという立場から、子どもの興味を育て、その世界を広げ、読書の純粋な喜びを子どもが味わえるように賢く本を選んでいくことを保護者に勧めている。絵本が子どもに及ぼす影響を論じた後で、本をプレゼントする際の工夫、あまり多くの本は必要ないということ、子どもが少し大きくなったら本棚の管理を子どもに任せるのも良いなどのアドバイスのほかに、価値の分かっている良い本を選ぶことの重要性を論じている。その後にムアが薦める本のリストがつけられている。

このリストでは、子どもの成長段階に合わせて7つの年齢層に分け、3歳までの子ども達のために15冊、3歳から5歳の子ども達のために23冊、5歳から7歳までが39冊、7歳から9歳までが67冊、9歳から11歳までが56冊、11歳から13歳までが52冊、13歳からの上の子ども達のために46冊、合計298冊が紹介されている。シリーズものであれば、他の作品名も挙げられている場合もあるので、実際は、300冊以上のタイトルが言及されていることになる。3歳までの子どもの本では、耳に快いひびきや面白いひびきを大切にしたランドルフ・コールデコットやピアトリクス・ポターらのマザーグースなどのわらべうたやABC絵本、動物や乗り物など、子どもにとってすなりと入れる身近なものを題材にした絵本が中心である。物語の筋というよりも、英語の音やリズムのおもしろさと良質の挿絵をとおして子どもを引きつけることができる本が紹介されている。ABC絵本としてワンダ・ガアグ(Wanda Gag)の『ABCうさぎ』(*The ABC Bunny*, 1933邦訳なし)が紹介されている。ABC絵本と言うと、“AはAppleのA”というように単語(物)が単独で提示されていく絵本が多い中、ガアグのアルファベットはABC順に「大きな、赤いりんご(Apple)のそばで心地よさげに寝ているうさぎ(Bunny)がいて、そのりんごがどしんと落っこちて(Crash)、うさぎがぴよんと飛び出す(Dash)」という風にアルファベット順の物語形式で語られ、英語圏の数あるアルファベット絵本の中でも秀逸な作として高い評価を受けているものである(吉田、34)。

3歳から5歳の子どものためのリストの中心は動物ものである。『ピーターラビットのおはなし』やレズリー・ブルックの『カラスのジョニーのあたらしい庭』(*Jonny Crow's New Garden*, 1935邦訳なし)などが有名な作品であろう。他には『もりのなか』や『まりーちゃんのひつじ』『げんきなマドレーヌ』など同じぐらいの年頃の子どもの主人公の物語絵本、ABC

絵本や童謡、昔話、聖書物語絵本もある。ここではポスター画家出身の C. B. フォールズの A B C 絵本(*ABC Book*, 1923邦訳なし)が紹介されている。ダブルデイ・ページ社に来て間もないメイ・マッシー(May Masse)が、子どもの本への抱負を「大切なのは色感、美、絵の質、活字、紙。なかでもこの色感が一番くせもの」と語るのをそばで聞いたフォールズが自分もそんな絵本を創りたいと言って手掛けたのがこの絵本だという(国際子ども図書館、10)。ムアは書評で、「オリジナリティ、パーソナリティ、形態の多様性」が顕著だったとして、フォールズの A B C 絵本を紹介している。フォールズの絵の単純さと生命感の強さが立ち現われていることによる生き生きとした質に着目し、アメリカ発の絵本製作を手掛ける時が来たと主張する。アメリカ国内だけでなく海外でも楽しめるような独特な形をそなえた独自の絵本の登場が待ち望まれると。さらにムアは、本の内容や挿絵の質だけでなく、表紙や余白の取り方など装丁をも含めた美しさを絵本に求めている(*My Roads*, 147)。

5 歳から 7 歳の子ども達になると大分ジャンルが広がる。昔話や押韻詩、ノンセンスの本や動物物語、ファンタジー、冒険物語の他に、外国の多国籍な物語が目につくようになる。ジェイコブズの集めたイギリスの昔話、ワンダ・ガアグが自由に翻訳したグリム童話やステューブンスンの詩の本、『エルマーのぼうけん』や『チムとゆうかんなせんちょうさん』などの冒険物語、『不思議の国のアリス』『くまのプーさん』などのファンタジーはよく知られた作品である。ノルウェイや中国、メキシコなどの海外を舞台にしたものや、『100まんびきのねこ』(*Millions of Cats*, 1928)のワンダ・ガアグのような移民系の画家による、まさに民族性をそなえたアメリカ的な作品によって多様性が強調されている。このような民族性の豊かさを構成する作家や画家が発掘された時代でもあったことがブックリストには反映されている。『太陽の東 月の西』でノルウェイを描いたアスビョルンセンや『オーラのたび』のドーレア夫妻、『シナの五にんきょうだい』や『あひるのピンのぼうけん』で中国を描いたクルト・ヴィーゼ、『ぶたの貯金箱』(*The Painted Pig*, 1930邦訳なし)や『やんちゃなアンジェロ』(*Angelo the Naughty One*, 1944邦訳なし)ではメキシコの生活がこの年齢で紹介されている。また、アメリカ文学の特徴であるトールテール(大げさな話、ほら話)の要素が見える。『100まんびきのねこ』で、おじいさんが山にねこを探しに行くと、何百、何千、百万という数のねこがいて、そのねこたちがみな、おじいさんの後についてくるというのは途方もない誇張であるが、なぜかすんなりと受け入れてしまうのがこの話の不思議な魅力と

なっている。マックロスキーの『かもさんおとおり』もこの年代で紹介されているが、マックロスキーは「私は常に、片足を現実におろし、もう片足をバナナの皮の上にしっかり乗せている」と言って、写実性とトールテールの要素を内包した自身の作風について解説している(吉田、35)。ムアは7歳までの子どもの本の選書に特別な注意を払ったと言っている(金山、148)。本の選定に際して、ジャンルと地域の多様性とアメリカ的な特色の紹介に配慮していたことがわかる。

7歳から9歳になるとその多様性はますます顕著になり、昔話からファンタジー、ノンセンス、冒険物語、詩などとジャンル分けをするのは難しい。スウィフトやホーソーン、ディケンズやデフォーなど小説家として有名な作者の作品やパニヤンの『天路歷程』も挙げられている。この世代が、ポール・アザールの言う子どものための文学のなかった時代に、大人の本棚から本を奪いとって自分たちのものとした年齢層の子どもたちなのであろう。外国を舞台にした物語の数が増えているのと同時に、アメリカ的ノンセンスの結晶であるサンドバグの『ルータバガ物語』(*Rootabaga Stories*, 1923邦訳なし)やムアの『ニコラス；マンハッタンのクリスマス物語』(*Nicholas: A Manhattan Christmas Story*, 1924邦訳なし)、ワイルダーの『大きな森の小さな家』などアメリカを舞台にしたものも多くなっている。

9歳から11歳の子ども対象には、質量ともに充実しており、読み応えのある本が多くなっている。『宝島』や『ホビットの冒険』『アンデルセン童話集』『ニルスのふしぎな旅』『たのしい川べ』『北風のうしろの国』『トム・ソーヤーの冒険』『星の王子さま』など児童文学の古典と言われる作品の数々と共に、アメリカ開拓精神を感じさせる作品や、『三人のおまわりさん』や『元気なモファットきょうだい』など、どんな子どもでもすんなりと読める愉快なお話も忘れられてはいない。

11歳から13歳になると、これまで以上にテーマや民族、地域の多様性が目を引く。『ドン・キホーテ』やハワード・パイルによるウィリアム・モリスを思わせる挿絵がついた『アーサー王と騎士たちの物語』(*The Story of King Arthur and His Knights*, 1903邦訳なし)、『三銃士』といったヨーロッパの古典と言われる作品があるかと思えば、『ハックルベリー・フィンの冒険』『ツバメ号とアマゾン号』など同年代の子どもの冒険物語もある。インカやチベットなど文化的に相当異なる国を舞台にした物語により、子ども達の視野と関心が広がるだろう。また開拓時代のアメリカの生活が描かれた作品も少なくない。自分の国アメリカの辿って来た歩みを教えてくれる物語が多い。

13歳から上では伝記や歴史物語、外国の物語が多い。サン＝テグジュペリの『風と砂と星』やチャールズ・ノードフとジェームズ・ノーマン・ホールによる『バウンティ号の反乱』(*Mutiny on the Bounty*, 1932邦訳なし)、アン・モロー・リンドバークの『翼よ、北に』などの史実に基づいた物語や、リンカーンやホイットマン、ウィリアム・ペン、ナイチンゲール、シュバイツァーなどの伝記によりアメリカと世界の歴史に目を向けさせる物語が推薦されている。さらに『白鯨』や『シェイクスピア全集』、『二都物語』『レ・ミゼラブル』(短縮版)など、世界の古典と言われるものがほぼそのままで挙げられている。A. T. ホワイトの『埋もれた世界』など考古学分野の物語もある。本と友達になった子ども達であれば、13歳にもなればこれだけ読めるというムアの実践から得た感覚からの判断であろう。この年齢層全体を通して、歴史の中の自分を意識させるような意図が感じられる。

ニューヨーク公共図書館でムアのもとで働いた経験のあるフランシス・クラーク・セイヤーズ(Frances Clarke Sayers)は二つの大戦の戦間期に世界中のさまざまな国々での生活についての本が数多く出版され、子どもの文学は、「他の声、他の部屋」についての知識を与えるような傾向に向かったと言う(Sayers, “Big Walking Day,” 29-31)。外国から渡って来たすぐれた作家や芸術家により本物のノルウェイ、イギリス、スウェーデン、ハンガリー、メキシコ、ボヘミアなどの国々の人々やくらし、風景が描かれていった。

子どもがどんな本をいつ読むべきかがわかれば、国家全体に対して大きな貢献になるという意見に対して、ムア自身は誰のためであろうと「もっともよい本」を選ぶという考え方は好きではないと明言している。ムアは子どもと本をつなごうとする人は、「読者を導こう」としてはいけないと言う。それよりは子ども達が知りたいと思うことを伝えるうまい方法を見つける方が大事である。なぜなら、子どもは違った趣味をもつ個人であり、子どもたちは関わってくる大人の、本に対する実際的な知識や潜在的な知識に対して敬意を抱いているからである(*My Roads*, 232)。レオノア・パワー(Leonore Power)は、ムアのもとで働く図書館員には図書館学に関する技術的なテクニックを学ぶとともに、自分自身の読書の範囲を広げ、自分自身の批評力を高め、そうして得た知識を子ども達と共有することが求められたと語っている(Power, 89)。特に11歳から13歳にかけてのムアが「中年層の子ども」と呼ぶ年頃の子ども達に対して「もっともよい本」のリストを作ろうとするのは不可能であるとする。たくさんの種類の

たくさんの本がなければならない。子どもに最善のものを与えたいと思うなら、親も教師も図書館員も、その時を見極め、一步脇に退いて、その時の訪れを見守るのが賢明であると説く(*My Roads*, 231-232)。したがって、ムアのブックリストもこのようなスタンスで作られたことを理解しておくべきであろう。特に7歳から上の子ども達のためのリストでは、その量的な多さだけでなく、その多様性には目を見張るものがある。

ブックリストの本の紹介文でムアがよく使う形容詞は、"authentic" (真正の)、"true" (真実の、本当の)、"true to ~" (~に忠実な)、"real" (本物の、本物らしい)、"original" (独自の) である。古代ギリシアのアリストテレスはかつて、「詩人は可能であると信じられない可能性よりも、可能らしく見える不可能性の方を選ぶ」⁽⁴⁾ と言ったのであるが、架空の物語であってもムアが注目したのは、物語の中で語られていることが単なる荒唐無稽な話ではなく、物語の枠組みの中ではありそうな話と信じられるだけの根拠があり、登場人物に実体を感じられること、あるいは設定された土地の性質や印象を忠実に伝えているか、プロットに根拠を感じられることである。子どもの本なら簡単に書けそうだと考えることは間違っている。読者がどんなに幼い子どもであろうとも、物語の中で起きている事柄に信憑性があること、舞台が本当に存在していると感じられるような書き方をしていることをムアは大事にしていた。彼女はその本の内容がどんなにノンセンスなものであろうとも、子どもの本質を捉えた作品を評価する。物語世界がこの世の現実を映し出す必要はない。しかしその世界の秩序に従って物事が進んでいることが重要である。たとえば、ベームelmanスの『げんきなマドレーヌ』には「パリの美しさと真の子ども理解とがある」と評している。『北風のうしろの国』や『お姫さまとゴブリン』の作者ジョージ・マクドナルドの批評では、彼の作品には「生きた真実」があり、それゆえこれらの物語は生き続けると言う(*The Three Owls*, 8)。そしてマクドナルドの息子グレヴィル・マクドナルドの次の言葉を引用している。

僕が読んだ父の物語や小説の中で『お姫さまとゴブリン』がもっとも本当らしく、もっとも現実的で、この言葉の正確な意味において、まさに「生きている」ようでした。(*The Three Owls*, 9)

ムアの考える"real"は現実を描くことではなく、真実であることを意味する。妖精の国の出来事であっても、真実を感じられるかどうかは作品の価値を決める。子ども騙しは通用しないのである。図書館員という専門職

や同僚への尊敬と合わせて、「子ども達への尊敬」「本への尊敬」を大事にしていたムアにとって、これはぜひとも守らなければならない基準だったのではないか(金山、141)。これまでムアの本を選ぶ際の基準を確認してきたが、反対にムアはどのような本を良しとしなかったのか。そこからムアがどのような本を評価したかを探してみたい。

ムアの批判

当時二流の本の出版が続く時勢にあって、裸の王様が自分が何も着ていないことを指摘されてからも、「行列は続けなければならない」と続けたのと、出版界は同じであるとムアは批判し、そのような本を親や先生から薦められることで本嫌いになっていく子どもが多いと言う(*My Roads* 24)。そして「本を読むことには努力が必要であるのだから、読者が読書にかけるエネルギーや善良な意志に報いなければならない」(25)とのアーサー・クウィラー＝クーチの言葉を引用している。ある時ムアは中年層の少年読者にどんな本を薦めるかと、ある出版者に尋ねた。「少年読者が自分と同一視できるような本物の少年主人公が常に前面に出ており、物語中の出来事はすべて彼を通して起こらなければならない。少年が興味をもてるような事柄に結び付いた事実、正確で具体的な詳細、作者の筆力が認められるもの」というのが答えだった(26)。戦争を経験したこの時代、子どもたちは戦争物語ではなく、「本物」の個人の物語を、本や新聞、雑誌、戦地からの手紙で読んだ。それゆえ、子どもの「本物」と「まがい物」を見分ける感覚はそれまで以上に研ぎ澄まされていたことだろう。実際の少年の本質により即したいという欲求、少年の公正と公平に対する感情により強く訴えたいという欲求をもって書く書き手こそが評価されるべきであるとムアは考えていた。このような基準で考えた時、フランシス・フロストの『農業祭に行くウィンディ・フット』(*Windy Foot at the County Fair*, 1947邦訳なし)が筆者の頭に浮かぶ。少年と子馬との愛情を軸に、家族と出かけた農業祭での出会いや困難、大人とのやりとりや家族愛などが爽やかに語られる物語である。

他方、この時代の少女物語は少年物語よりもさらに劣っている。作家たちは、自己分析と自分の作った登場人物の性格改造に忙しく、『サニーブルック農園のレベッカ』以降、女の子が自分自身の人生を自由に生きるような作品がない。少女向け物語は「内省的で、感傷的、道徳的あるいは教訓主義的である」とし、例として『エルシー・ディンズモー』(*Elsie Dinsmore*, 1867邦訳なし)、『少女ポリアンナ』(*Pollyanna*, 1913)、『りんごの

丘のベッツィー』(*Understood Betsy*, 1916)を挙げる。『少女ボリアンナ』は現実からほど遠いとしながら、『エルシー』よりは健康的であり、『ベッツィー』は教育的な理論と実践がなければ、もっとよい物語になりうるとして、ブックリストに含んでいる(*My Roads*, 28-29)。少女物語に何を求めるか、とムアが問いを投げかけた図書館員の答えがおもしろい。

舞台が都会であれ田舎であれ、少年ものと同じくらい客観的でおもしろい本物の物語。どうして女の子向けの物語作家は、女主人公を改造するために田舎にやったり、田舎の女の子を都会に連れてきて、都会に住むいところ達の人工的な暮らしを作り直させたりするのかしら？(*My Roads*, 29)

少女向けの物語では、真実であるかどうかよりも、教化しようとする道徳的な意図との闘いの方が緊急の課題だったようである。しかし、このような傾向は19世紀までの文学の趨勢であったことを考えると、ムアの主張は新しい文学のあり方を提示していることに他ならなかった。

10歳以降の子どもたちはフェアリーテールや伝説、神話の後に続く何かを求めている。11歳から13歳は子どもの読書熱が始まる時期であると考え、その年頃の子ども達に手渡す本の質的改善にムアは力を注いでいたと思われる。彼女のブックリストの半数が9歳までの子どもに薦めたい本であり、残りの半数が9歳以上の子どものための本である。19世紀前半、子どもの本がほとんどなかった時代には、子ども達は大人の本棚から『ロビンソン・クルーソー』や『ガリバー旅行記』などを大人の本棚から奪い取って読んだ(アザール, 67-111)。しかし、今少女向けの物語が数多く出版されるようになって、よい本と悪い本を見極めるのは容易なことではなくなった。その中で「真実であること」「本物であること」という基準はムアの譲れない尺度であったことを示すエピソードを紹介しよう。

ハンフリー・カーペンターとマリ・ブリチャードは『世界児童文学百科』の中で、E. B. ホワイト(E. B. White, 1899~1985)の項で、『スチュアート・リトル』(*Stuart Little*, 1945)の出版に際して、ムアがホワイトに出版を取りやめるように説得しようとしたエピソードを載せている。この一件についてはセイヤーズが詳述している(*Anne Carroll Moore*, 241-245)。『スチュアート・リトル』は出版の時点で喝さいをもって世に迎えられ、セイヤーズの時代ですでに「古典」と目され、現代では映画化もされている作品である。この作品に対して異議を唱えたのは1945年10月28

日付の『ニューヨークタイムズ』に掲載されたマルコム・カウリー (Malcolm Cowley) の書評だけであった。カウリーはこの本を称えながらもこの物語の断片的な構造に対する懸念を表明したのである。ムアは当時『ホーンブック』の書評欄を担当していたが、バーサ・マホーニー・ミラーに「これまでの人生でこんなに本にがっかりしたことはないわ。でもそれは言わないことにする」と語っていたという。しかし、彼女はホワイト本人に手紙を書いた。その後20年間その手紙は埋もれたままになる。しかし1966年の『スチュアート・リトル』のテレビドラマ化に伴い、1966年3月6日付の『ニューヨークタイムズ』は「図書館員は子どもにはダメと言った」との見出しで、ホワイトの記憶にもとづいてこの件を以下のように掲載した。

彼女の手紙は長く、親しみ深く、緊急で、まったくの驚きだった。彼女は出版予定の『スチュアート・リトル』のゲラを読んだと言いき、出版を取りやめるようにと強く提言してきた。私の記憶によれば、彼女の言い分は私の本は肯定的でなく、結論がはっきりしておらず、子どもに向いていない、それゆえ、もしも出版されれば作者である私の名を汚すことになる。これはきつい言葉だった。しかしムア女史がわざわざこれを書いてくれたことについてはありがたく思った。(242)

ホワイトは、しかし、この本に自分は満足しているとして出版に踏み切り、ムアはテニスのルールのような厳密なルールが児童文学にはあるという考えなのだろうと皮肉を込めてコメントしている。

ムアはタイプライターを使うことはなかったが、重要と思われる手紙は自筆で書き写し、書類の束にはさんでおくという習慣があった。ホワイトへの当該の手紙もその一つであった。この長い手紙を読むと、ムアが単なる好き嫌いで作品を評価しているのではなく、時間をおいて子ども達の顔を思い出しながら再読し、彼女の図書館員としての責任と批評家としての義務を全うしようという覚悟の上で、すでに印刷に回っている原稿の差し止めを提案したと推察できる。すでに高い評価を得ているE. B. ホワイトともあろう人がこの本を出すことの影響を懸念している。この作品の問題をムアは以下のように記している。

もしもこの原稿がプロの批評家としての私の意見を求めて送られて

きたものであったなら、私はこの出版には二重の危険—出版社と著者にとって—があると言わざるを得なかったでしょう。挿絵はある程度の助けになりますが、これに欠落しているもの—それは完全に実現された空想ですが—、それを埋め合わせることはできないでしょう。第1章の後には、この物語がどんどん手に負えなくなり、工夫が無理じいされており、スチュアート自身、バランスを崩してふらついているように思われます。

学校の章に来到と、二つの世界がすっかりごちゃまぜになってしまします。スチュアートはやすやすと一つの世界から他の世界へと移れるけれども、両方の世界で彼が生き生きと描かれているかという、私にはとてもそうは思えませんでした。(Anne Carroll Moore, 243-244)

ホワイトの20年後の記憶から書き起こされた記事とムアの批評との間にはズレがあるものの、彼女は『スチュアート・リトル』は図書館でも学校でも置くことが難しいと結論付けている。『スチュアート・リトル』は出版後50年経ってからも映画化されるなどの人気を博した物語であった。しかしムアの考える視点からもう一度この作品を読むと、カウリーの指摘するように一つひとつのエピソードが根拠なく場当たりに語られており、スチュアート・リトルにある程度感情移入して読むことはできても、スチュアートのカヌーをめちゃくちゃに壊したのが何者かも語られなければ、彼が探し求めた鳥がどうなったかも示唆されることなく終わってしまう。あまり時間をかけずに、熟成させることなく書かれた作品という印象が強い。トラブルを乗り越え、すべてがうまく進んでいくというパターンはテレビドラマ化するにはふさわしいかもしれないが、一度読んだらそれで読み捨てにされる類の本ではある。ムアの手紙は作者にとっては不愉快なものであったに違いない。しかしホワイトが他に良い作品を残しながらも、結果的に『スチュアート・リトル』の作者として後世に名を残したのは、まさにムアの警告どおりで皮肉とも言えよう。

基本的にムアは子ども達に薦めたいと思わない本の書評は書かない。したがって、『スチュアート・リトル』の例のように具体的に彼女がどの本のどこを批判したいのかを明確に発言することはほとんどない。しかし先に言及したとおり、『エルシー・ディンズモー』についてはよく思っていなかったことを示唆する記録がいくつかある。ムアは『エルシー・ディンズモー』を読む10歳の女の子とのやりとりの中で、「本当にエルシーが好

きな？私の知っている女の子達は、エルシーのことを笑って、鼻もちならない気どり屋と呼んでいるわよ」と話したエピソードを紹介している。この女の子はムアに書店に連れて行ってもらって本を買ってもらう際、最終的には自分で選んだマクドナルドの『お姫さまとゴブリン』を読むことになる。わざわざ『エルシー』が好きだと言っている女の子に対して、あからさまにその主人公の批判をするとは、『エルシー』のどこがそれほどムアは気に入らなかったのであろうか。

『エルシー・ディンズモー』はアメリカの作家マーサ・ファーカーソン・フィンリ(Martha Farquharson Finley, 1828-1909)の作であるが、作者は生涯のほとんどを教会の仕事と日曜学校関連の文書、100冊におよぶ本の執筆に捧げ、そのほとんどは少女向けの道徳臭の強い小説だった。その中でも人気が高かったのは28冊ある『エルシー』シリーズであった(Barbara Parry, Preface, v)。1977年版のまえがきを書いたパリーは「従順で敬虔、自己充足的なヒロインのエルシーは、ヴィクトリア朝の親達によって美德の鑑とされた。しかし現代的な基準から見ると、彼女は‘鼻持ちならない気どり屋’ということになろう」との*Encyclopedia Americana* (1972)の紹介文を引用している。『世界児童文学百科』での紹介でも、「母を亡くし、父は渡欧中で不在のエルシーは、愛情薄い親戚たちのもとで育てられている。父は帰国しても、はじめエルシーにほとんど愛情を示さない。しかし彼女は敬愛と忍耐でついに父の心を勝ちとる」と紹介しつつ、エルシーを「気どり屋だとする見方」があり、「父親との関係にどぎまぎするような性的なふくみがあることが考察されており」、「ほんのちょっとしたことで涙を流す気質の持ち主」でもあることを書き添えている(111)。確かに古めかしく、エルシーの性格付けの難を指摘しつつも、パリーはこの本には「独特な魅力」があるとしている。

エルシーはホレース・ディンズモーが18歳の時に、南部の裕福な貿易商の美しい娘と秘密結婚した時に生まれた娘であるが、この秘密結婚がばれた時に、ホレースは勉学のために外国にやられ、エルシーの母は、ホレースが死んだと聞かされ、孤独と悲しみの中に娘を生み、その一週間後に亡くなる。やがてエルシーは父方の祖父の家で育てられるが、祖父の後妻やその子ども達(ホレースの弟妹)、女性家庭教師から冷たい扱いを受ける。彼女が、年齢は変わらないが叔父にあたるアーサーから嫌がらせを受け、家庭教師と祖母から受けた不当な扱いに対して怒りと憤りの感情が込み上げてくるときに、聖書を読んでそれを何とか抑え、キリストの道に反していると自分を責めてさめざめと泣く姿は、確かにあまりにも子どもの

実像からかけ離れているという印象を受ける。さらには、父に求められても、安息日である日曜日に宗教的でない曲を弾くことを堅く拒むなど、彼女の信仰の厳格さを表すエピソードがそこここに見える。また打ち解けあった後の父娘関係が、先のハンフリーの紹介や、さらにバリーが詳しく述べるフロイト的な「家族ロマンス」の微妙な雰囲気醸し出しているのも否めない。しかし先の10歳の女の子同様、バリー自身が少女時代にエルシーと共に涙を流し、日曜日には漫画本を読むのを一年間辞めたほどであると告白する程影響力の強い本であったかもしれない。後にムアのもとで働いたレオノア・パワーも、採用に際してムアから面接を受けた際に、これまで読んできた本の一冊としてこの本を挙げている。それだけ当時人氣のあった作品であったのだろう。バリーは『エルシー・ディンズモー』を読者から愛される「良い駄本」(the good bad book)と評しているが、ムア自身は「悪い善良な本」(bad good books)の範疇に入れている(*My Roads*, 28)。ヴィクトリア朝的価値観を色濃く湛えたこの本は、新聞小説のように起伏に富んでおり、メロドラマ小説的な面白さはあったのかもしれない。しかしこのような子女を教化しようとする説教臭さや涙を流してばかりいる薄幸の美少女がヒロインの感傷的な小説は、到底ムアの趣味には合わなかったであろう。ムアはこういった作品は当時の女の子の置かれた社会的生活を反映しているのではないかと懸念しつつ、実際の女の子の方がずっと生き生きとしているのだから、文学にももっと面白いものを求めていくべきだと結論づける。『エルシー』が批判されるべきだとしたら、現代的な見地からは、主人公が「気どりや」だからというよりも、父親の愛を渴望しつつ受け入れられない少女の苦難が、神経症にさいなまれるのではないかと心配になるほど大きいという面である。エルシーは物語の半分以上で泣いているか、眼に涙を浮かべている。またキスや愛撫という言葉の多用も、彼女の愛の渴望を示す要素であるが、読者を食傷気味にさせる。筆者としては全体的に病的な印象を拭い去ることができなかった。反面、子どもを理解しようとせずに力を振う大人たちの実像や、子どもを強化しようという目的を文学に託した意図など、この時代の指向性を伝える例として、現代の私たちには興味深い作品ではある。

このエピソードが示すとおり、ヨーロッパから信仰の自由を求めてアメリカへ渡った「巡礼の父祖」と呼ばれる清教徒たちが定着したニューイングランド地方の出身でありながら、あるいはそのせいか、ムアは子どもの本の中に教訓を挿入することに対して反対の立場をとり続けた。

どちらの国（英国と米国）においても、子ども達のための教訓主義的な作品の大きな遺産が残っています。これはフランス革命直後にどんどん蓄積していったものです。（中略）しかし、これは子ども達には、親や先生が好む本として映り、図書館員には、書棚の中の枯れ枝として映る類のものとして簡単にわかるのです。（*My Roads*, 50）

さらにムアは強い語調で、教訓主義や恩着せがましさという傾向はこの国の読書習慣において好ましいものではないと主張する。

もちろんムアはキリスト教そのものを否定しているわけではない。彼女は選書リストに複数の聖書物語や『天路歷程』のようなキリスト教文学を推薦している。ただし、文学の中の子どもを良くしようとする動きに対しては敏感に反応し、文学にそのような要素を忍び込ませようとすることに異議を唱え続けた。文学に純然たる楽しみを求めるムアの立場こそ、当時新しい立場だった。文学における道徳的要素は長い文学の伝統でもある。このような19世紀までの文学のあり方から子ども達を自由にしようとする闘いは容易ではなかっただろう。ムアは、「本の中の善良さとか実生活でも本の中でもみんなを同じように振舞わせようとする傾向は嫌いです」（*My Roads*, 67）と断言し、子どもの文学にとって重要なのは、「情報を与え、教化し、向上させること」ではなく、「新しい世紀、異なる世界に住む子ども達の頭と心を目覚めさせ、啓発し、大きくすることなのです」（*My Roads*, 21）としている。子ども達に本を手渡すことは、文化を手渡すことであると同時に、新しい時代を生きる人を創ることでもあるのだ。次に文化を手渡すということを意識していたことが推察できるムア自身の作品『ニコラス』を考察しよう。

ムアとニコラス

『ニコラス；マンハッタンのクリスマス物語』（*Nicholas: A Manhattan Christmas Story*, G. P. Putnam's & Sons, 1924）は『ニコラスと金のがちょう』（*Nicholas and the Golden Goose*, G. P. Putnam's & Sons, 1932）とともに、ムアが執筆した物語作品で、ジェイ・ヴァン・エヴェレン（Jay Van Everen）が挿絵をつけている。これは聖ニコラスの日（12月6日）にオランダを船出し、クリスマス・イブにマンハッタンにやって来たニコラスという小さなお人形の男の子が、さまざまな人々や妖精、動物たちと出会い、クリスマス・イブから春になってオランダへ帰る日までニューヨーク

で過ごすすてきな休暇物語である。そもそもムアがこの物語を書くにいたったきっかけは、1920年のクリスマス・イブにニューヨーク公共図書館の若い同僚レオノア・パワーからもらった20センチほどの小さな木製のお人形の男の子だった。ムアはこのお人形が一目で好きになり、ニコラスと名付け、おはなしの時間になると連れて来ていたのだが、ある女の子に、「ニコラスの物語を書いたら？」と勧められたことが始まりであった。このお人形を図書館内のお話の時間やパーティだけでなく、どこへ出かけるにもハンドバッグに入れて連れていくほど、ムアは可愛がっていた(Sayers, *Anne Carroll Moore* 172-176)。

オランダとニューヨークは歴史的に古いつながりがあり、ヨーロッパから最初に現在のニューヨークに入植し、ニューアムステルダムと名付けたのはオランダ人であった。ニューヨークの守護聖人である聖ニコラスは、オランダの守護聖人で、オランダでは聖ニコラスの日に子どもたちはプレゼントをもらうのだそう。サンタクロースの原型となったのが、この聖ニコラスである。聖ニコラスとクリスマスの物語は、クレメント・ムーアのあのすばらしい『クリスマスのまえのぼん』に描かれている。アメリカにやってきたオランダ人のはいていたズボンの形から、ニューヨークの人々は「ニッカーボッカーズ」と呼ばれ、ワシントン・アービング(Washington Irving) はディートリッヒ・ニッカーボッカーのペンネームで、小説『ニッカーボッカーのニューヨークの歴史』(*Knickerbocker's History of New York*, 1928邦訳なし)を書いた。オランダから来た人形のニコラスもニコラス・ニッカーボッカーと呼ばれている。ジェフリー・パーソンズ(Geoffrey Parsons) がムアの『ニコラス』を以下のように評している。

どの大人もマンハッタン島がどんなに残酷で、騒がしい鋼鉄とスピードの迷宮であるか知っている。かつて、何年も前は、ニューヨークはそのゆったりとした気どらない雰囲気、親しみやすい町かどゆえに愛されていた。そこで仕事をするとなると、人はそれによって興奮し、仰天させられる。この街は巨大な機械装置の中に埋もれてしまった。この街の昔から伝わる魔法を呼び起こし、老若問わず人の心にニューヨークの暖かさを灯すのは、ムア女史の独特で思いがけない才能である。(The Three Owls, 22-23)

ニコラスは妖精のブラウニーが主催するニューヨーク公共図書館内でのクリスマスパーティに招待される。これは「おもちゃのチャチャチャ」と

いう歌にあるような光景で、真夜中になると一年間本の中に閉じ込められている登場人物―妖精たち、トロール、不思議の国アリスやニルス・ホルゲションまで―が飛び出してくる。さらには、クレメント・ムーアや子どものための雑誌『セント・ニコラス』(*St. Nicholas*)の編集者で『銀のスケート』の作者メアリー・メイプス・ドッジ(Mary Mapes Dodge)やワシントン・アーヴィングといった作家達まで登場する。ニコラスがニューヨークに到着して真っ先に会おうのはブラウニーと、クリスマスの時期にだけ姿を現すトロールであるが、彼らによって、クリスマスの時だけでなく、いつだってすてきな事を起こすことができる年齢不詳のアン・キャラウエー(Ann Caraway)に紹介される。これがまさしくアン・キャロル・ムアその人なのであるが、彼女はニコラスにニューヨークのクリスマスの雰囲気存分に味わわせるために、クリスマス・ショッピングを一緒にしたり、レストランや教会や植民地時代に球技が行われたボウリンググリーンなどいろいろな所にニコラスを連れて行き、新しい人々に出会わせ、風物を見せ、ニューヨークの物語を語る。特にクリスマス・ショッピングの描写はたくさんの地名が出てきて、ニューヨークを知らない人間にとっては、固有名詞の多さに圧倒されてついていきにくい部分ではあるが、この本がニューヨークの子ども達に捧げられていることを考慮すれば、今、あるいはかつてニューヨークっ子であった人々にはクリスマスの祝祭性がノスタルジーとともに迫ってくる場面であろう。クリスマスの後で、ニコラスは動物園に行って動物たちと出会う。ニコラスの親友のトロールが熊に姿を変えて、茶色熊たちと雪合戦をしたり、笑い上戸のプレーリードッグの群れに出会ったりする楽しい場面もある。

この後、新年を過ごすために、ニコラスとアン・キャラウエイは彼女の甥にあたるジョー・スター(Joe Star)のメイン州にある実家へと出かける。ジョーは同行することができなかったが、ニコラスとアンは、ジョーの母親や弟のベンに暖かく迎えられる。この気どらない、しかしニコラスに自分たちが大事にしているものを何でも見せてあげたい、たくさんの経験をさせてあげたいという歓迎の仕方は、まさにアメリカ的である。ムアが子ども時代を送ったメイン州のワシントン山の懷に位置するリメリックの風景や暮らし方が生き生きと再現されている。ジョーの母親はまさにすばらしい「緑の親指」の持ち主で、これは見事な庭を育てていたアンの母を想起させる。クリスマスから数えて十二日目、東方の三博士が幼子イエスを拝んだその顕現祭を記念する十二夜のお祝いでは、クリスマスが終わると帰らなければならないトロールからニコラスへのプレゼントとして、ブ

ルックリンブリッジとマンハッタンブリッジをタクシーに乗って行ったり来たりする。ニコラスから"old Giant"と親しみを込めて呼ばれるトルルは、ニコラスに別れも告げずに突然姿を消すのだが、このような特別なプレゼントを彼は友達のために用意する。このタクシーに乗って橋を行ったり来たりするシーンは、ニューヨーク公共図書館にムアを訪ねたアーサー・ラッカムとムアが彼の船の時間まで、何度もタクシーで橋を行き来したことを彷彿とさせる(Sayers, *Anne Carroll Moore*, 153-154)。



Anne Carroll Moore, *Nicholas* より
ニューヨークを後にするトルル

絵本の中の登場人物の他に、クレメント・ムーアの『クリスマスのまへのぼん』が引用され、アンデルセンやディケンズの名前もアービングらと共に出てくる。これらの人物は特に物語の筋と関わってくることもなければ、何かエピソードを構成しているわけでもない。これらの名前は、この物語の中に出てくる古くから伝わるマザーグースや伝説と共に、子どもの文学を創り上げてきた作家や伝統へのオマージュと言えるだろう。人物名であれ地名であれ、こ

この本の中の多くの固有名詞が、それを知らない人々にとってはあまり意味を持たない、すなわち筋と直結する要素ではないことについて批判はできる。しかし、この物語の登場人物の多くが空想世界の住人でありながらも、物語自体が「本当らしく」「真実」を湛え、ニューヨークやメイン州の生活を「忠実に」描写していることに間違いはない。付け加えるまでもないが、祝祭性が支配的なこの物語には誰かを教化しようという道徳臭はまったく感じられない。目を輝かせてニューヨークの街中を歩き、新しい事物を見、何でも楽しんでみるニコラスを通して、読者はこの街に身を置く喜びを感じとる。エヴェレンの挿絵は控えめながら、作品の現実世界と空想世界の両方をうまく捉えている。特にニューヨークの摩天楼を背景に、熊の姿になったトルルが旅立とうとしている絵などでは、この両者が見事に融合していると言えよう。

アン・キャロル・ムアと彼女の人形ニコラスに話を戻すと、アンはニコ

ラスを仲介として子ども達の距離を縮めていたし、初対面の人のニコラスへの反応を見て、その人との距離感を測る面があった。子どもと本と大人であるムアをつなぐ道具立てとしての人形の機能を評価する一方で、ムアの人形への執着ぶりが馬鹿げていると批判していた人々もあった。これについてはムア自身というよりは、周囲の人間がすこし気恥ずかしく感じさせられ、彼女の遊びに付き合っていたというのが実情だったのではないか。⁽⁵⁾ いつ出かける時も一緒だったニコラスの人形をタクシーに置き忘れて失くしてしまった時の彼女の動揺は、相当なものであっただろう。しかし彼女のために腕のいい木彫り職人に頼んでニコラスのレプリカを作ってもらった人がいて、そのレプリカをムアはもらった。その人形もまた何年後かに失くしてしまい、めずらしく彼女は失意に打ち碎かれるのであるが、イギリスの詩人ウォルター・デ・ラ・メアはムアと人形の関係をよく捉えていた。彼女が詩人を訪ねた際の別れ際、「アン・キャロル・ムアに心からよろしくお伝えください。それから彼女の第二の自我ニコラスによろしく」と言ったという(Sayers, *Anne Carroll Moore*, 186-187)。彼はムアとニコラスの関係の本質を見抜いていたと思われる。ニコラスのキラキラ輝く目にうつる新鮮なニューヨークの営みは、他でもないムアの愛してやまないニューヨークへの眼差しなのであった。またニコラスと一緒にいたから、ムアはニューヨークをさらに愛せたとと言えるのかもしれない。ムアはニューヨークのかつての姿を、子ども達の代表であるニコラスに体験させたかったのだろう。作者のノスタルジーがリアリティとファンタジーのはざまに見え隠れする作品である。

ムアとバンクストリート派

このようにして精力的に書評を続けたムアとその弟子にあたる図書館員や、助言を仰いだ出版関係者、著者、画家達がアメリカ児童図書館黎明期の主流を構成したとすると、ムアの批評でまったく取り上げられることのなかった、実際のところ無視された傍流にバンクストリート教育学校(Bank Street)がある。これはルーシー・スプレイグ・ミッチェル(Lucy Sprague Mitchell, 1878-1967)がジョン・デューイ(John Dewey)、エドワード・ソーンダイク(Edward L. Thorndike)、ジークムント・フロイト(Sigmund Freud)らの教育学者から精神分析学者の理論をもとに始めた実験的教育学校である。バンクストリート派は、アメリカ独自の教育活動であり、研究、教員養成、幼児教育をその柱とした。子どもを不完全な大人として扱う19世紀までの見方ではなく、個々の子どもの潜在能力に合わせ

て、できるだけ十全に成長していけるような学習の場を子ども達に提供することを主眼とした(Marcus, 44-45)。指導の中心にいたミッチェルは、子どもの精神的成長は、道具を使って手仕事をしたり、多様なおもちゃで遊んだり、教室の外へ遠足に出かけることなどで促されるというウィリアム・ジェームズ(William James)の理論ののっとなって、教育体系を確立しようとしていた。幼い子どもの言語習得過程を詳細に観察したミッチェルは、子どもは意味を持った言葉を使うよりもずっと前に、音で遊ぶ。子ども達が最初に言葉に反応するのは、リズムや音の質、音のパターンであるとして、子ども達が意味のある言葉を発話するまでに「ここで今」の感覚を感じとれる世界に十分に浸らなければならないという持論を掲げていた。この理論からミッチェルは2歳から7歳向けの子どもの文学『ここで今の物語』(*Here-and-Now Story Book*, 1921邦訳なし)を開発していく。空想物語とは違い、この物語の題材は高層ビルや飛行機、タグボートやトロリーなど、1920年代のアメリカ都市部で暮らす子ども達が日ごろ目にするものだった。年齢が進めばファンタジーや伝説を子ども達は楽しめるようになるだろうが、幼いうちは身近で五感で感じられるものを子ども達に与えたいとミッチェルは考えた。ここの教育実験学校で学んだのがマーガレット・ワイズ・ブラウン(Margaret Wise Brown)だった。ブラウンはムアと接触がなかったわけではない。ミッチェルの強い要請を受けて出版社を始めたウィリアム・スコットのもとでブラウンは編集の仕事をしたり、創作をしていた。ブラウンがエズフィール・スロボドキーナやクレメント・ハードと組んで作った2冊の本を含む5冊を持って、1938年にスコットとブラウンがムアを訪ねた時のシーンをマークスは再現している。

「スコットさん、これらの本についての私の意見をお知りになりたいですか。」とムアは慎重に言葉を切った。

「ええ、もちろんです。ムアさん。」無理に楽観的な調子をこめて、スコットは答えた。

「くずですよ。スコットさん。みんなくずですよ。」

面会は終わった。スコットとマーガレットはそそくさと荷物をまとめ、よろよろと街中に戻って行った。(102)

このようにして、ブラウンのデビューは先送りされた。

ムアとミッチェルの大きな違いは何だったのか。それは幼児期の絵本の

扱いだったように思われる。ミッチェルは「赤ずきん」は残忍だとして、「シンデレラ」は感傷的だとして退けたが、フェアリーテールをすべて排除しようとしたわけではない。しかし「子どもの想像力は大人の想像力の後押しを求めることなしに、その表現の自由を与えられれば確かに花開く。子どもが魔法による後押しが必要だと考えるのは、子ども自身の生き生きとした想像の泉に信頼することを恐れる色あせた大人の心だけなのである」というミッチェルの主張は、ムアらへの宣戦布告であったとマーカスは論じる(53-4)。このようにしてフェアリーテールをめぐる論争がここから始まったらしい。両者は非常に強い主張とパーソナリティを持った人物であったため、折り合うことはなかった。マーカスは両者の子ども時代への態度の違いは、ムアは子ども時代を歴史の変化や環境的な要因から守られるべき無垢の状態と捉えていたのに対し、ミッチェルは、子ども時代はそのような変化や要因によって形成されていくべきものと捉えていたことにあると考える。革新的な教育論としてミッチェルの理論は多くの教育学者や批評家の反響を呼んだ。

感情的な摩擦を抜きにすれば、ムアがミッチェルとほど遠い立場にいたとは考えにくい。またムアはミッチェルの理論から資するところもあったのではないだろうか。ミッチェルは2歳から7歳を「ここで今」文学の主な対象と考えていた。ムアのブックリストを見ると、3歳以下の子どもの欄にはフェアリーテールは入っておらず、ほとんどがマザーグースなどのわらべうたである。意味よりも音やリズムの楽しさに子どもが浸れる本である。ミッチェルの子どもは最初に意味ではなく音に反応するという説に反するものはない。ではそのリストの中の物語絵本を見てみよう。『はなをくんくん』は動物達が春のかすかな訪れを嗅ぎ取って、冬眠から目覚め一輪の花を見つける物語であるし、ボイド・スミスの『ひよこのせかい』(*Chicken World*, 1910邦訳なし)では生まれたばかりのひよこ達が新しい物を見、新しいことを習って成長していく過程が、季節の営みとともに進んで行く様子が美しく描かれている。ベッティーナの『ココロ』(*Cocolo*, 1950邦訳なし)はロバと少年の別れと再会の物語がロバの冒険と受難をからめて描かれている家族的な物語である。『ペレのあたらしいふく』は、少年が自分の服を作ってもらうために働き、欲しい物を手に入れていく過程が描かれた実生活に基づいた物語である。ムアはM. W. ブラウンの『せんろはつづく』もリストに入れている。ムアの紹介文はブラウンが担当した文にはまったく触れず、絵についてであったが。耳に快い音のひびきを楽しめる絵本や、子ども達が現実生活の範囲から想像できる絵本が選ばれ

ていることを考えると、両者の見解が極端に離れていたとは考えにくい。

しかし、『ひよこのせかい』も『ココロ』も『ペレ』もどれもすばらしいが、対象はもう少し年齢が上でも良いように感じられる。『ひよこのせかい』のユーモアはもう少し大きくなってからの方が理解できるだろうし、『ペレ』は自分でいろいろなことができるようになった年齢の子どもが読むと自分とペレを同一化できるのではないだろうか。そういう意味で、ミッチェルに師事したブラウンの『おやすみなさいのほん』は、大きな緑の部屋の家具や飾り物などが初めに紹介され、うさぎの子どもがねんねする前に月(moon)や部屋の中にある風船(balloon)、手袋(mittens)や子猫(kittens)、ブラシ(brush)やおかゆ(mush)などに「おやすみなさい」を言っていく静かで落ち着いた絵本である。韻を踏んで物語は進んで行き、安心感とぬくもりを感じさせる。このような幼い子ども達でも毎日目している、自分の暮らしの中にある物を題材にする本が、以上のような事情で排除されたのが残念である。⁽⁶⁾

おわりに

ムアが子ども達に伝えたい本というのは、以上見てきたとおり、手を抜くことなく描かれた真実を感じさせるものであることが基本であった。その上で顕著だったのは、アメリカという国の独自性と歴史の観念である。1892年から1954年までに開設されていたニューヨーク港エリス島の移民局では、62年間に約1,600万人の移民を受け入れたという(国際子ども図書館、7)。移民の国アメリカの抱える問題や課題があったことは容易に推察できるし、ムアの意識の中では、移民の子ども達に開かれた図書館への志があった。キング牧師らによる黒人差別撤廃運動がおこり、ジョン・F. ケネディ大統領が公民権法に署名したのは1960年代のことであるから、この時代のマイノリティの人々の窮状は想像に難くない。この頃大量に受け入れられた移民は、言語の壁による就業の難しさに直面し、貧困に苦しんでいた。父親のためにプルタルコス『英雄伝』を借りていった男の子のエピソード (Power, 91) から、厳しい状況をうかがい知ることが出来る。このような時代にあって、アメリカを知る物語の数々、そしてたくさんのエスニックな背景をもった作品群を紹介することで、アメリカ人としての一体感(pluribus unum)だけでなく、それぞれのアイデンティティを認めあう心をムアは育てようとしていたのであろう。しかも、トールテールに見られる大らかなアメリカ的ユーモアの感覚を忘れることはなかった。

靴屋から庭師になった人が図書館に生ける花を丹精して育てていたこと

を紹介し、図書館内に、大都市や、森の中の生活、小川や草原や丘や、もっと広々とした子どもの庭を反映させたいという願いを、彼も自分も持っていたとムアは述懐する。それは、自分が幼いころに好きだった物語が、春の田舎の風景を一度も見たことのない子ども達には何の意味も持たないことを、この職業に就いて割と早い段階でムアは気付いたからだ(*My Roads*, 64)。「鋼鉄とスピードの迷宮」と化したニューヨークに住む子ども達が、ただ日常に見聞きするものだけでなく、美しくもっとゆっくりとした時代の風物や精神を子ども達に伝えたいと願っていたことだろう。そういう意味で、ムアとミッチェルは懐古的と革新的と対比できるのかもしれない。ただしムアは一貫して、子どもの本の文学性を大事にしていた。

さらにアメリカの歴史や有名人物の伝記からは、自分が生きる今という時代も歴史の一部であることを、おぼろげながらも子ども達に感じてもらいたいと考えていたのではないか。ベネットの『アメリカ人の本』(*A Book of Americans*, 1933 邦訳なし)では、コロンブスやジョージ・ワシントン、アメリカ先住民など、さまざまな人々が人間味あふれて紹介されている。一通りの歴史物ではない詩の本である。最後に出てくるアンクル・サムの挿絵のついたUSAのところでは、次のように語っている。

彼らは我々を賢いと思うだろうかーばかげていると思うだろうか？
(中略)

そして、我々自身が歴史になるまで、その答えは我々にはわからない。

このように今を歴史の中に位置づけることで、今を客観的に見るユーモアの感覚が生まれる。

ムアのブックリストでは「たくさんの種類のたくさんの本」が薦められている。何がよいかを見極めるには、結局はたくさんのよしとされてきた本を読むことである。

実際に子どもの文学についての知識を得るのに近道はありません。それは本を比較しながらたくさん読むことと、常に本を子ども時代という世界の中でテストしていくことで得られるのです。(*The Three Owls*, 64)

子ども時代の光にかざして、図書館員が時間を作ってできるだけ多くの本を読むことで、子ども達に何らかの真実あるいは誠実さを内包したよい

本を手渡したいというのがムアの心からの願いであり、それが彼女からの図書館員、編集者、そして作者への要求であった。

-
- (1) 本稿の執筆にあたり、立教大学名誉教授の吉田新一先生からルーシー・ミッチェルについてご教示いただいた。また、新潟市立真砂小学校図書館司書の田村あづささんにはたくさんの資料を探していただき、お世話になった。ここに感謝の意を表したい。
 - (2) 金山愛子「アメリカ児童図書館黎明期に子どもの文学普及に貢献した人々（1）～アン・キャロル・ムア①」『敬和学園大学研究紀要』第22号（敬和学園大学人文学部、2013年）133-155参照。このあたりの時代背景とムアらの働きについては張替、2-19の解説がわかりやすい。
 - (3) “Seven Stories High”の本文とそれに続くブックリストは、1948年版の『コンプトンズ・エンサイクロペディア』掲載のものを使った。ムアは改訂を重ねていたため、年によって内容が異なる。“Seven Stories High”の翻訳は「七段の子どもの本棚をつくる」として前稿に掲載したが、このブックリストに日本で翻訳が出ているものに関してはその情報を加えたものを合わせて、近々発行する予定である。リストの内容に関しては、そちらを参照されたい。
 - (4) アリストテレス『詩学』第18章、今道友信訳（アリストテレス全集17、岩波書店、1972年）67。一部金山の改訳。
 - (5) Marcusはこの件について批判的な語調で書いている。Marcus, 55参照。
 - (6) バンクストリート教育学校とマーガレット・ワイズ・ブラウンについては、『「おやすみなさい おつきさま」ができるまで』のマーカスの解説がわかりやすい。また光吉夏弥、2-6にも詳しい紹介がある。

引用文献

- Moore, Anne Carroll, *Nicholas: A Manhattan Christmas Story*, G. P. Putnam's Sons, New York & London, 1924
- , *The Three Owls: A Book about Children's Books*, Macmillan Company, New York, 1925
- , *My Roads to Childhood: Views and Reviews of Children's Books*, Doubleday, Doran & Company, Inc., 1939
- , “Seven Stories High: The Child's Own Library,” *Compton's Pictured Encyclopedia and Fact-Index*, Vol. 8, F. E. Compton & Company, Chicago, 1948
- Benét, Rosemary and Stephen Vincent, *A Book of Americans*, Farrar and Rinehart Inc., New York, 1933
- Finley, Martha, *Elsie Dinsmore*, with a preface by Barbara Parry, Garland Publishing, Inc., New York & London, 1977. Rreprint of the 1867 ed. published by M. W. Dodd, New York
- Frost, Frances, *Windy Foot at the County Fair*, McGraw-Hill Book Company, Inc., New York: London, 1947

- Marcus, Leonard S. , *Margaret Wise Brown: Awakened by the Moon*, Harper-Perennial, 1992/2001
- McElderry, Margaret K., "The Best of Times, the Worst of Times: Children's Book Publishing, 1924-1974," *The Horn Book Magazine*, Vol. L, October 1974, Number 5, The Horn Book, Incorporated, Boston
- Mitchell, Lucy Sprague, *Here and Now Story Book ; Two to Seven year Olds*, E. P. Dutton & Co.Inc., 1921/1932, Kessinger Legacy Reprints
- Sayers, Frances Clarke, *Anne Carroll Moore: A Biography*, Hamish Hamilton, London, 1972
- . "Big Walking Day," Frances Lander Spain ed., *Reading without Boundaries: Essays presented to Anne Carroll Moore on the Occasion of the Fiftieth Anniversary of the Inauguration of Library Service to Children at The New York Public Library*, The New York Public Library, 1956
- Power, Leonore St. John, "Recollections of Anne Carroll Moore," Frances Lander Spain ed., *Reading without Boundaries: Essays presented to Anne Carroll Moore on the occasion of the Fiftieth Anniversary of the Inauguration of Library Service to Children at The New York Public Library*, The New York Public Library, 1956
- White, E. B., *Stuart Little*, Harper Trophy, 1945/1973
- アザール、ポール『本・子ども・大人』矢崎源九郎、横山正矢共訳、紀伊国屋書店、1957 / 1990年
- アリストテレス「詩学」今道友信訳『アリストテレス全集』17、岩波書店、1972年
- 金山愛子「アメリカ児童図書館黎明期に子どもの文学普及に貢献した人々（1）～アン・キャロル・ムア①～」『敬和学園大学研究紀要』第22号、敬和学園大学人文学部、2013年
- カーペンター・ハンフリー&プリチャード・マリ『世界児童文学百科』神宮輝夫監訳、原書房、1999/2006年
- 国立国会図書館国際子ども図書館 会館10周年及び国民読書年記念展示会『絵本の黄金時代』国立国会図書館国際こども図書館、2010年
- 張替恵子「アメリカ児童図書館の先達 — ヤグッシュさんの論文から —」『こどもとしゃかん』77、東京子ども図書館、1998年・春
- ブラウン、マーガレット・ワイズ文・ハード・クレメント絵、レナード・S・マーカス『「おやすみなさいおつきさま」ができるまで』せたていじ、中村妙子訳、評論社、2001年
- 光吉夏弥・梶基樹著編『絵本図書館：世界の絵本作家たち』、ブックグローブ社、2012年
- 吉田新一「絵本の愉しみ（2）ーアメリカ絵本の展開ー」『平成19年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録』、国立国会図書館国際こども図書館、2008年